

4. 高砂市の歴史文化を見直す効果的な視点(テーマ)

地域の歴史文化を効果的な視点(テーマ)に基づいて見直していくことで、これまで価値に気がつかなかった未知の歴史文化資源に光があたり、埋もれていた重要な資源群を包括的に把握することができる。また、歴史文化資源同士がテーマを通じて結びつき、関係性を持った歴史文化資源のまとまりが見えてくる。

こうした未知の歴史文化資源群の発見や歴史文化資源の関係性の把握は、地域の歴史や文化を立体的にわかりやすく浮かびあがらせ、歴史文化に裏打ちされた地域の個性や魅力を市民や市外の人たちに力強く発信する。

高砂市は、古代、中世、近世と続く豊かな歴史文化を持ち、近代化へと続く流れの中で、地域の個性が何であるか、これまで、現状認識は十分でなかった。これに対し、テーマに基づく歴史文化の見直しは、まだ失われていない身近な貴重な資源の存在に市民が気づき、変容したかに思える現在の風景の底辺に、骨太の歴史がいまだに受け継がれていることを再認識してもらう契機となる。これは日々くらしているまちの個性や魅力の底力を市民が再確認することにつながる。このことは、市民が歴史文化資源群の保存活用に取り組み、さらに個性や魅力を高めていく機運を醸成することに繋がる。

歴史文化のテーマを設定することは、高砂市の歩みを見直すことで、市民が高砂市の個性的な自然や、文化交流拠点であった高砂市の歴史的役割を再確認するものである。逆に言えば、効果的なテーマを設定することにより、市民が高砂市に誇りを見だし、高砂市の将来を肯定的に考える視点を提供できる。

（１）高砂市の歴史文化を見直すテーマと関連文化財群

本構想では、高砂市の歴史文化のテーマを四点設定する。

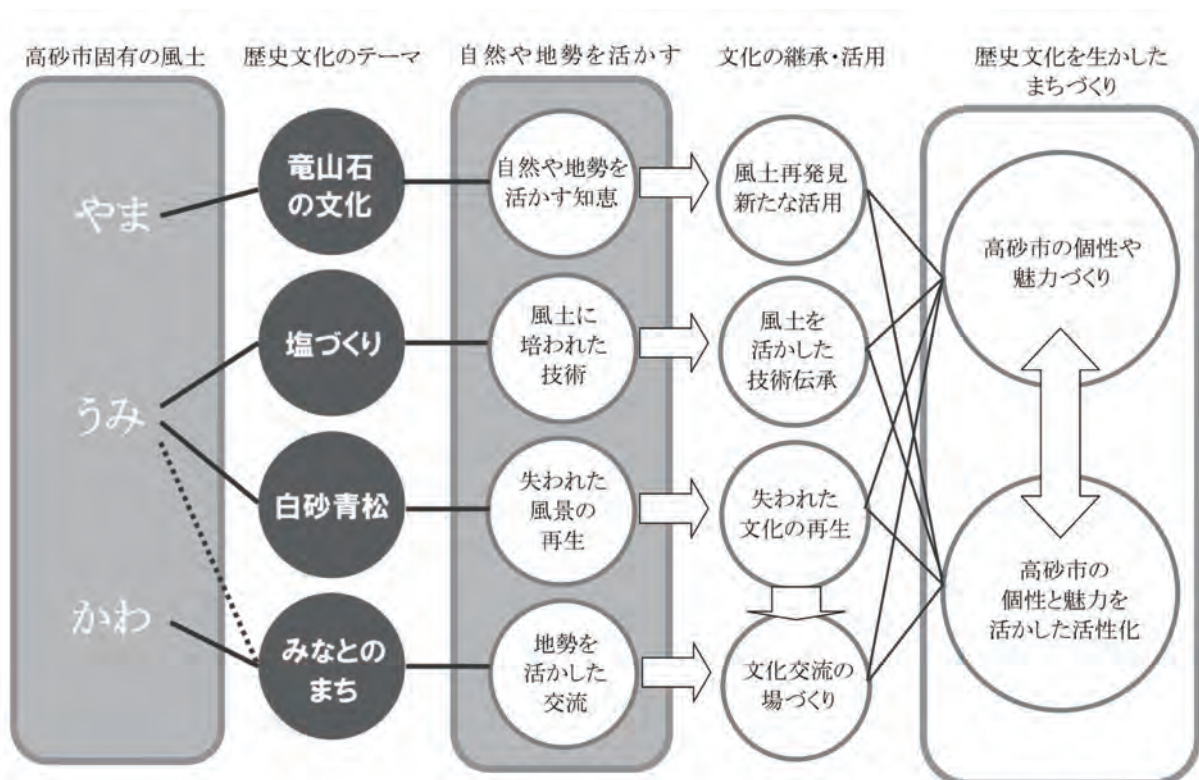
「竜山石の文化」 「白砂青松」 「塩づくり」 「みなとのまち」

高砂市の歴史文化の成立背景には、「やま（竜山）」「うみ（播磨灘）」「かわ（加古川とその支流）」という固有の自然地形、地勢があり、いわば高砂市は「やま」「うみ」とそれを繋ぐ「かわ」の恵みを受けた土地に成立したまちである。ここにあげるテーマは、高砂固有の風土である「やま」「うみ」「かわ」をそれぞれ活かして成立したものである。

同時にそれぞれ、高砂市固有の風土を、「時代の変化する要請にあわせて活かす知恵（竜山石の文化）」、「風土に培われた技術（塩づくり）」、「失われつつある風土の再生の努力（白砂青松）」、「風土を活かした交流の場づくり（みなとのまち）」を現している。

すなわち、四つのテーマで高砂市の歴史文化を掘り下げていくことは、高砂市固有の風土や、その風土を活かす代々の高砂の人々の知恵や気質を再確認することになる。

なお、歴史文化のテーマにもとづいて、相互に関連性のある一定のまとまりを、関連文化財群とする。



竜山石の文化

古くから地域で使われている竜山石

市内には、竜山石を使用した古墳や石棺、生産の場である石切場があり、川を利用して西日本へも運ばれていたと考えられています。



竜山石の関連文化財群



竜山石切場

石の宝殿



天岩船（冢形石棺）



堺市仁徳陵古墳の石棺
（復元）

古くから地域で使われている竜山石

中世になっても、竜山石を使用した石仏、石塔などがつくられ、高砂市内に広く分布しています。



凡例

- 古代の遺跡（古墳、石棺、遺跡）
- 中世の遺跡（石棺仏、石仏、石塔など）



阿弥陀共同墓地
五輪塔

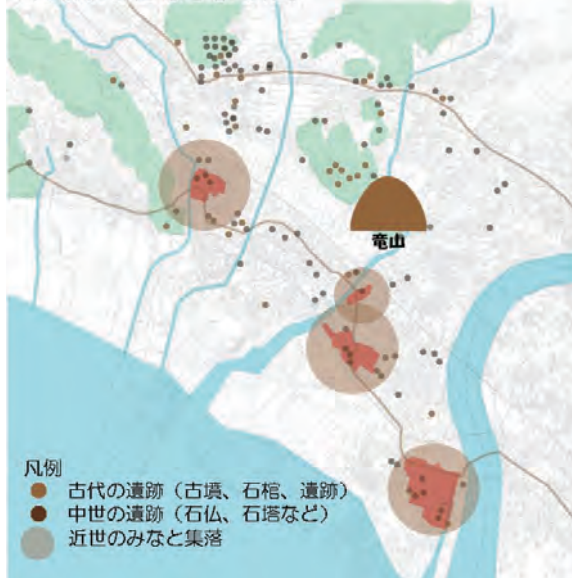


大日寺 石仏

竜山石の文化

建物にも使われるようになる竜山石

近世になると、建物の基礎や石垣などにも竜山石が使われ、まちの身近なところにも見られるようになりました。



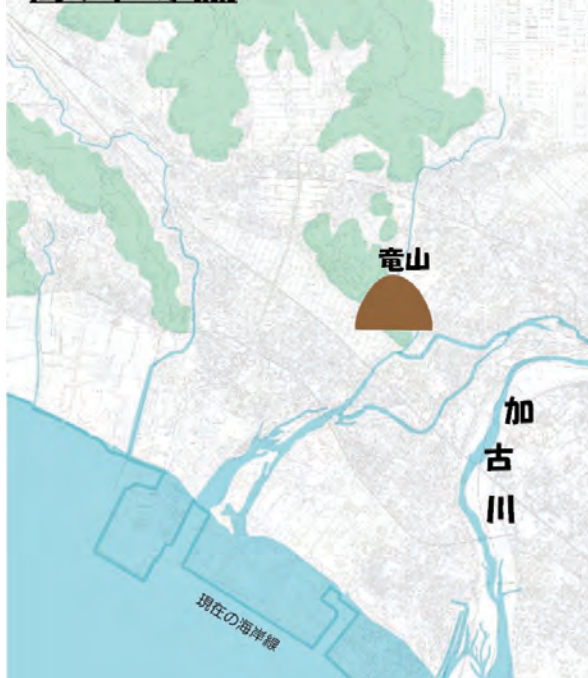
近世城郭の石垣（明石城）



用水路石垣

みなとのまち

高砂市の川筋



全国へ広がる竜山石

近世以降になると、加古川からも竜山石が全国へ運ばれるようになりました。



みなとのまち

舟運で栄えたまち

歴史的な建物も、当時舟運で栄えていたまちに多く見られます。



<高砂>



三連蔵



肥料問屋



十輪寺

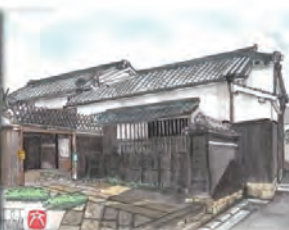


高砂神社

<今市>



土堀



米問屋

<曾根>



古い町なみ



廃寺の墓石



土堀と石垣



竜山石(赤・青・黄)
の石垣



旧入江家住宅

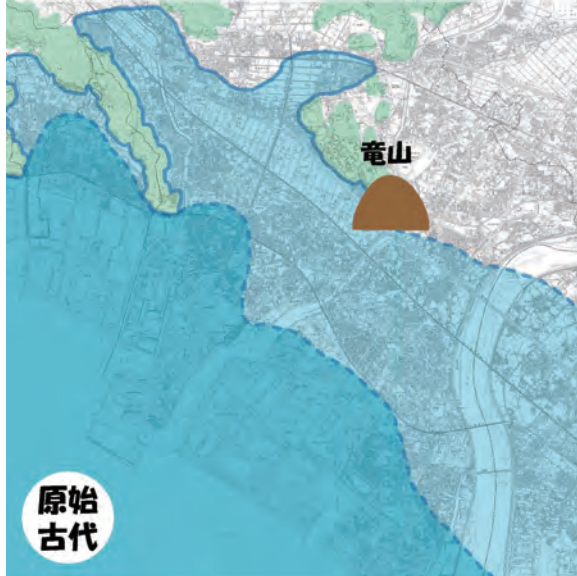


曾根天満宮一ツ物

白砂青松

海岸線の変遷

時代を追うごとに海岸線が遠くなり、かつての白砂青松の風景が見られなくなってしまいます。



海岸線の変遷

万葉集や謡曲にもある「曽根の松」と「相生の松」が海岸線にありました。



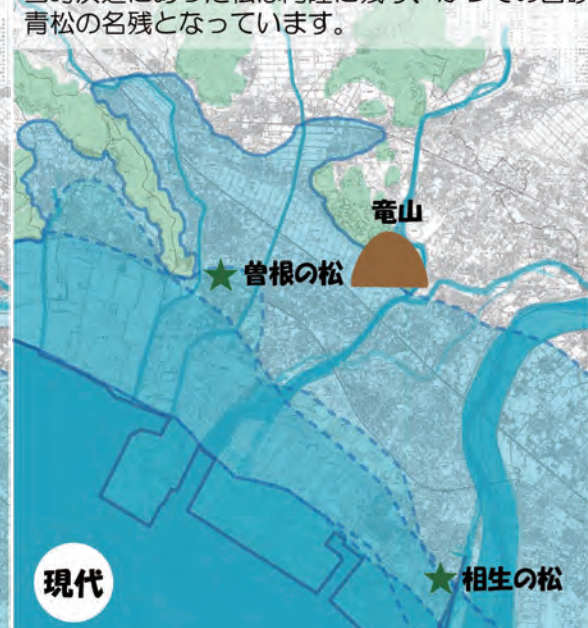
海岸線の変遷

徐々に海岸線が遠くなります。



海岸線の変遷

当時浜辺にあった松は内陸に残り、かつての白砂青松の名残となっています。



白砂青松

当時の面影を残す景色

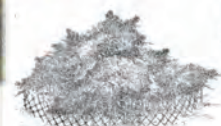
松があることで、当時の海岸線の白砂青松の様子を読み取ることができます。



向島公園の松林



曾根松原公園



塩づくり

塩田で栄えたまち

「現在ではその痕跡がわかりにくくなっていますが、歴史のあるまちです。」



＜曾根の塩田＞



明治初期の塩田



入浜式塩田(昭和戦前)



流化式塩田
(昭和29~46年)



現在の塩田跡地

① 竜山石の文化

【テーマ：高砂の風景に身近に息づく資源、高砂や地域の役割が透けて見える資源】

「竜山石の文化」は、多くの高砂市民に馴染みが薄い。そのため、高砂市全域に埋もれた無数の未知の資源に気づき、掘り起こしてもらうことで、身近な歴史文化資源の存在や高砂市の歴史的役割を見直してもらう効果的なテーマとなる。

高砂市固有の自然地形として竜山があり、竜山は、高砂市でしか採れない竜山石という貴重な資源をもたらした。竜山石は年代ごとに役割を変え、地域ごとに様相を変えながら使われ、市内全域に数多く存在し、暮らしに密着した所で受け継がれている。竜山石は高砂市の歴史的風景の底辺に人知れず息づいている。一方、市民は竜山石について、その価値や存在をあまり認識していない。しかしその価値を知り、竜山石をテーマに地域を見直せば、ごく身近に多くの竜山石資源を発見することができる。このことにより、地域の歴史を再認識するとともに、発見する行為自体が楽しくなり、その活動が持続し広がりを見せていくものと思われる。

竜山石の年代や地域ごとの使われ方の違いから、時代ごとの高砂市の役割や、地域ごとの文化の違いを推し量ることもできる。竜山石を全国に流通させた生産、加工、運搬、交易というシステムに着目すれば、河川や港を生かした交流拠点としての高砂市の歴史的役割もうかびあがる。

「竜山石の文化」は、他のテーマとも関連しながら、地域の身近な歴史文化のテーマで、広がりのあるテーマである。

【関連文化財群：年代や地域ごとの特徴的なまとまり、石の生産システムに係る資源群】

竜山石の文化に係る関連文化財群は市域全体に多様な年代、形態により存在している。また、以下のように幾つかの小さなまとまりとして捉えることができる。

まず年代別のまとまりが考えられる。古代に関しては、石の宝殿、石棺、古墳等の遺構群、中世に関しては石仏、石造物等の遺構群、近世・近代の道標、墓石、建築・土木遺構群、交易の様子を物語る古文書群など、時代ごとに特色をもったまとまりが見られる。また各年代を通じて採石が続けられた竜山石切場がこれに加えられる。

地域別に捉えると、旧集落単位で竜山石遺構が集積し、地域と竜山石とのかかわりが浮かびあがる。例えば、石切場周辺の集落では石材生産と直結した遺構群、運搬ルート沿いの集落では建築・土木やそれらを活用したまちなみと関連した遺構群など、それぞれ特色を持ったまとまりがある。

竜山石を一連の生産システムの遺構群として捉えると、竜山石切場、採石遺構、運搬経路、採石用具・技術などの資源群のまとまりが考えられる。

また石の宝殿や周辺地理の記述がある『播磨国風土記』や、竜山石を用いた石棺や古墳も、古代からの竜山石の文化を物語る歴史文化資源として関連文化財群に加えることができる。

こうした竜山石の文化に係る遺構群はそれぞれ関連しあいながら全市に渡って存在しており、これら全体を一つの関連文化財群として位置づけることができる。



【時光寺古墳に埋葬された竜山石製石棺】



【曽根天満宮石橋に使用された竜山石】



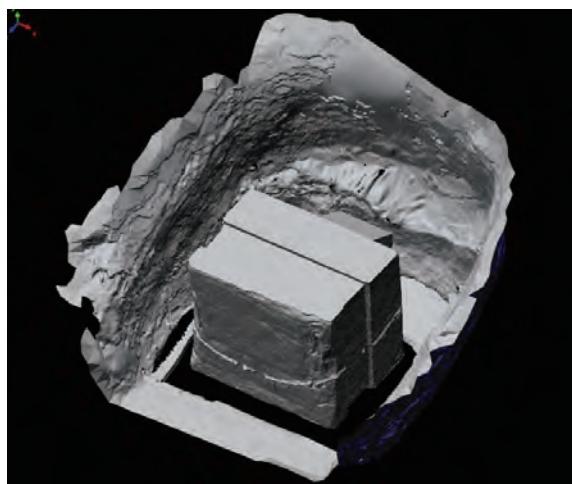
【竜山石の取引を記した近代文書】



【石工技術】



【竜山石切場の崖面】



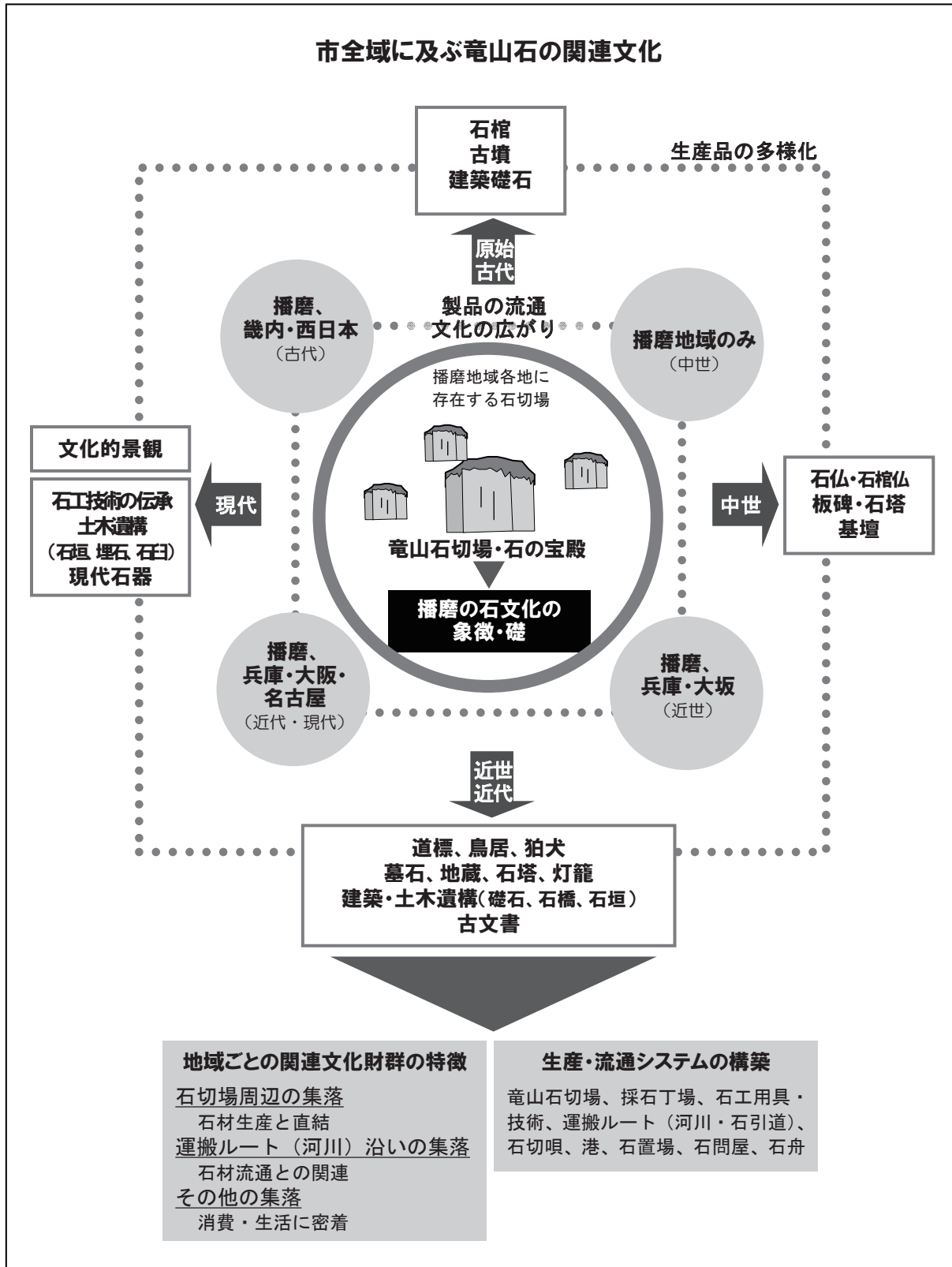
【石の宝殿3次元画像】



【地蔵として信仰対象となった石棺仏】

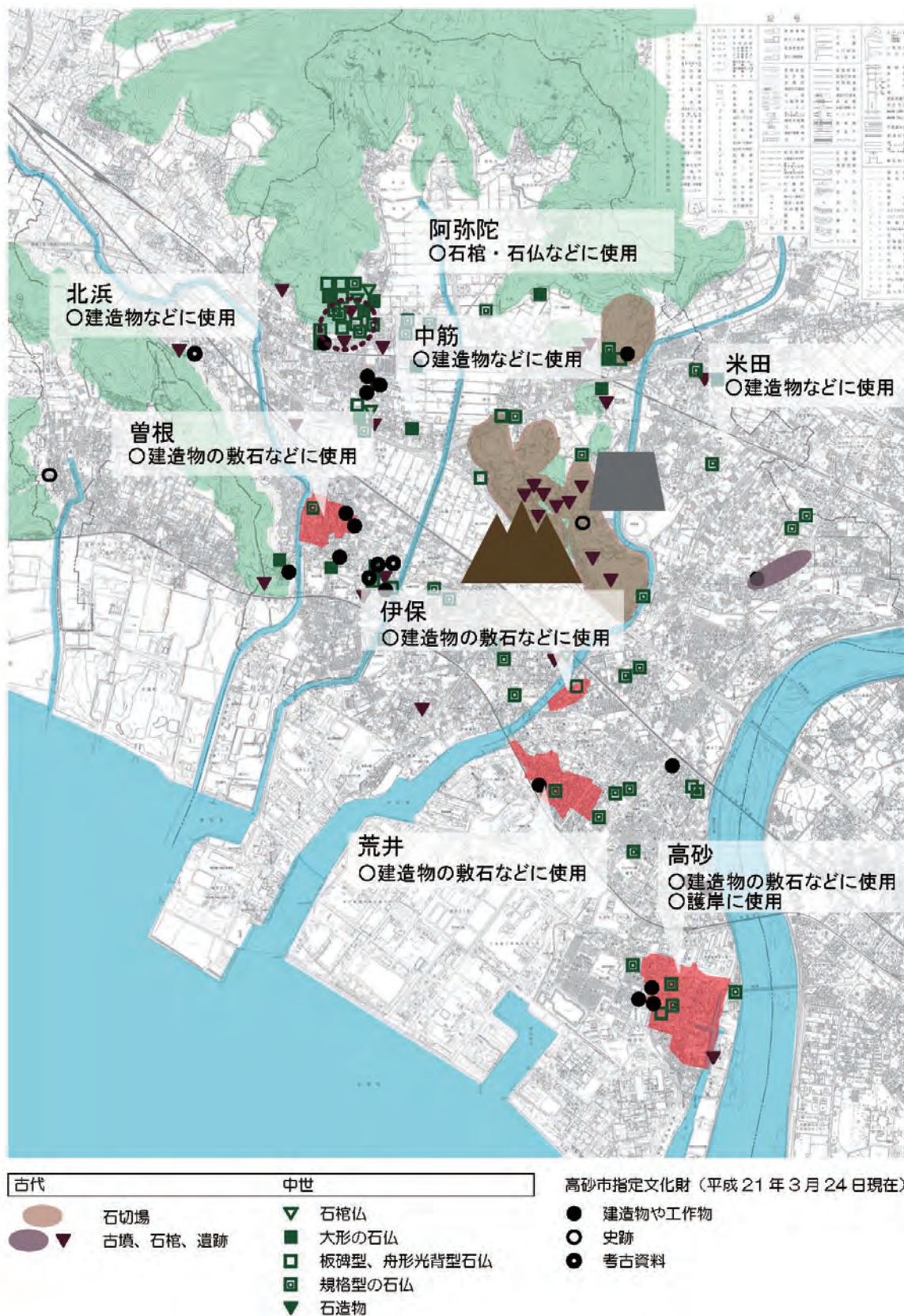


【民家石垣の排水口に彫刻された蛙】



【竜山石の文化 関連文化財群相関図】

【竜山石の文化】



② 白砂青松

【テーマ：多くの文人歌人に愛でられた高砂の原風景】

「白砂青松」は、高砂市が面する「うみ（播磨灘）・なぎさ」に由来するテーマである。「白砂青松」は古来より美しく神秘的な風景として、古代の『万葉集』や謡曲に謳われた高砂の原風景である。高砂を象徴するものとして、アンケート等からもうかがい知れる。白砂青松の風景は海岸の埋め立てと工業化の波の中で失われてしまったように見える。しかし「白砂青松」の痕跡や記録は今に受け継がれている。こうした痕跡や記録は、実はそれ自体が貴重な歴史文化資源であると考えられる。これらは、かつて存在した高砂の原風景を語り継ぐうえでの心のよりどころとなる。

「白砂青松」については高砂海浜公園、あらい浜風公園など、失われた渚や松林が再生されている。こうした風景の「再生」の動きの中で、痕跡や記録といった歴史文化資源は貴重な手掛かりとなり、再生されたもの自体も新たな高砂市の歴史文化資源として位置づけることができる。

このように「白砂青松」は、高砂市が失いかけている歴史文化の再生に向けた貴重なテーマであると考えられる。

【関連文化財群：何代にも渡り大切に受け継がれた霊松、そして松を再生する動き】

白砂青松に関しては、自然地形そのものは残存していないが、以下のような資源について関連文化財群として捉えることができる。

高砂神社、荒井神社、曾根天満宮には霊松の末裔があり、次の代の苗木まで育てられ続けている。旧海岸部に自生する松はかつての風景を今に伝えるものであり、これらの植物群は貴重な歴史文化資源である。

また、白砂青松の風景や高砂の松、曾根の松を描いた多くの絵画資料、模型などが残されており、これらの記録も関連文化財群として捉えることができる。古代から風光明媚な景色を愛でて詠まれた『万葉集』の歌、謡曲「高砂」、尉と姥の物語などは、白砂青松に関連し産み出された文化として、これも関連文化財群に含めることができる。

沿岸部の企業が植栽した松や高砂海浜公園などの新たに植えられた松は、新しい資源であるが、将来的な歴史文化資源であり、今後、関連文化財群に加えていくことができる。



【初代曾根の松の模型】



【高砂海浜公園の砂浜と松並木】

③ 塩づくり

【テーマ：高砂の環境に根ざした伝統技術・伝統産業、歴史文化に学ぶ手がかり】

「塩づくり」は、高砂市が面する「うみ（播磨灘）・なぎさ」に由来するテーマである。「塩づくり」は中世、近世にかけて、高砂市固有の自然地形を活用して成立し、地域の発展に寄与した産業である。「白砂青松」と同様、高砂市を象徴した古くからの生業として、長らく市民の生活に密着してきたテーマである。

製塩に関しても、産業自体は終息し、失われたかに見える。しかし、製塩従事者の集落や製塩技術の伝播記録など、痕跡や記録が発見されている。

「塩づくり」は、高砂市の自然環境を活用した、伝統技術にもとづく地場産業であり、市民が具体的に学び、後世に受け継ぐことができるものとして、市民活動を導き出すことができる。また、水源や交通等を活かして進出してきた近代工業も、環境に根ざした産業としてとらえ、活用することができる。

「塩づくり」は、高砂市が失いかけている歴史文化を受け継ぎ、応用、発展させていくための貴重なテーマであると考えられる。

【関連文化財群：製塩従事者の集落や歴史文化資源、そして受け継がれる製塩技術それ自体】

製塩遺構として、塩田それ自体は失われている、しかし塩田があったことを想起させる地形はまだ残存している。また、製塩で栄えた旧集落は曽根や梅井・西浜等のまちなみが残し、とくに梅井は製塩労働者のために計画的につくられた集落であり、その町割り、まちなみなどが関連文化財群として捉えることができる。曽根には塩田経営で庄屋もつとめた旧入江家住宅も現存している。また製塩に係る記録も多数残存している。

具体的に市民が学び、再現できる対象として、技術自体が貴重な関連文化財であると考えられる。

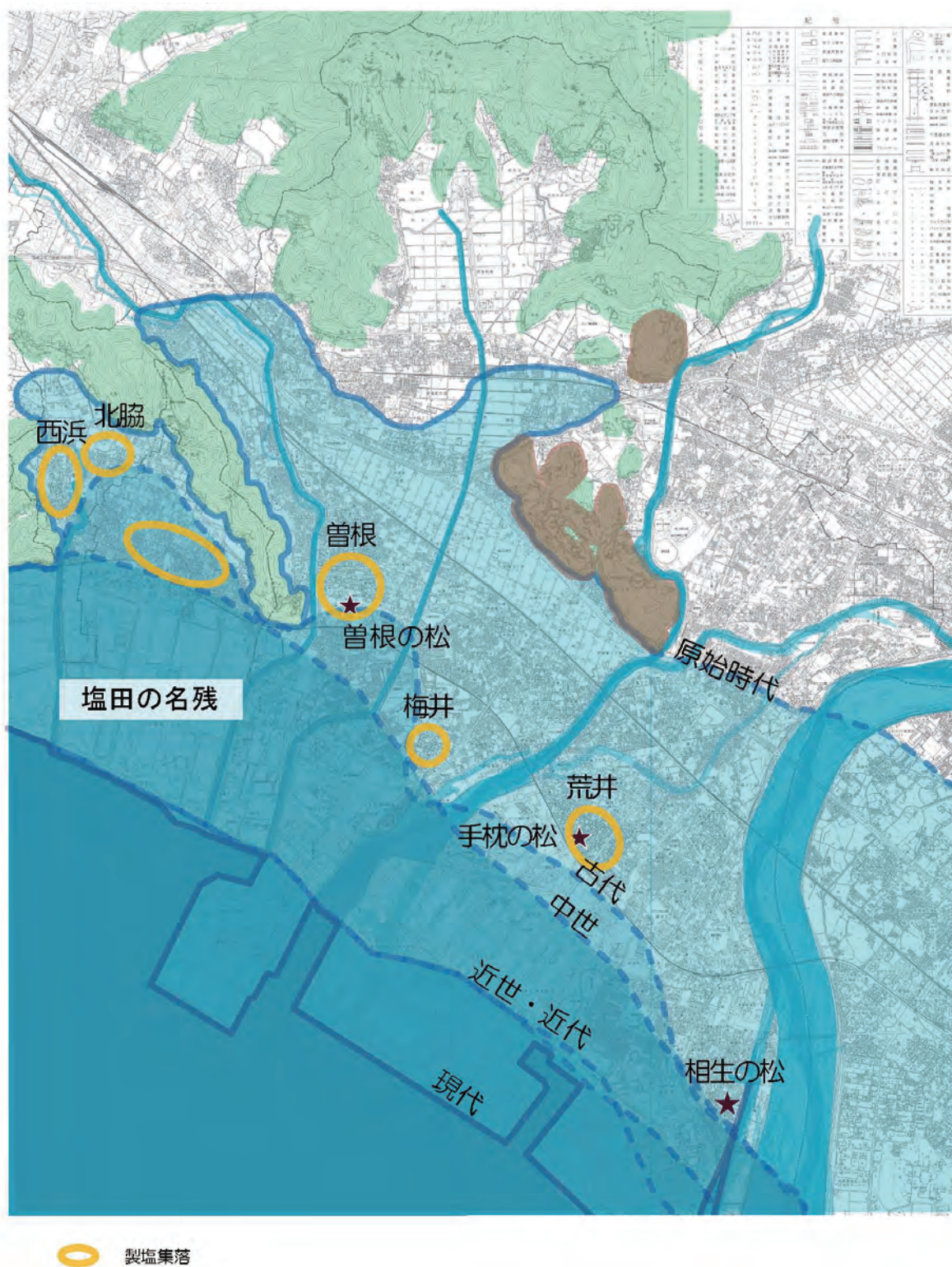


【塩田地主民家(旧入江家住宅)】



【曽根塩田跡地】

【白砂青松・塩づくり】



④ みなとのまち

【テーマ：高砂の文化交流の拠点、歴史文化資源が集積した地域】

「みなとのまち」は高砂市を南北に流れる「かわ（加古川とその支流）」に由来するテーマであり、「やま（竜山）」と「うみ（播磨灘）」をつなぐテーマでもある。川と川、海と川のそれぞれが交わるところには、水、人、物資が集積する。そこに集落が形成され、交易・交流する場として、みなとのまちがうまれている。「みなとのまち」は人と物が行き交う拠点であり、人と人の交流から文化が育まれ、祭礼が営まれた。高砂の加古川、法華山谷川、松村川、天川には、それぞれ港町が成立し、こうした歴史を物語る歴史文化資源が集約して存在している。また「みなとのまち」は「やま」「うみ」が交わる場でもあり、「竜山石の文化」や「白砂青松」「塩づくり」に係る歴史文化資源も集積している。これらのテーマは関連しあっており、例えば、運搬手法が限られた古代に、竜山石が西日本各地に流通した背景には、竜山の横を流れ播磨灘に注ぐ法華山谷川とその川筋の港町の存在が大きかったと考えられる。

【関連文化財群：歴史的建造物やまちなみ・祭礼、対比的な曽根、今市、高砂などのまち】

「みなとのまち」は加古川とその支流ごとに、異なる年代、過程により成立、発展している。製塩で栄えた曽根、古くから川港として開けた伊保・今市、近世の築港により発展した高砂、それぞれが持つ歴史文化資源を比較することで、その違いや個性、魅力が明らかになる。これらのまちは、現在の高砂市街地の歴史的コアとなる地域であり、市民生活の中心地であり、それぞれの地域の歴史文化資源のまとまりが一つの関連文化財群として捉えられる。

関連文化財群には、それぞれのまちの歴史的建造物、地割り、道路形態、これらから成立する歴史的まちなみ、祭礼、風俗習慣、その他様々なものが考えられる。歴史的まちなみだけみても、路地がジグザグに入り組む曽根、川筋に沿って屋敷が並ぶ今市、町家が短冊形の敷地に並ぶ整ったまちなみの高砂、とそれぞれ個性に富んでいる。

この他、竜山石の石造物や建築・土木資材、霊松、製塩遺構なども、それぞれのまちによって特徴を持って分布している。例えば、曽根では竜山石が建築の土台石に用いられており、古い路地筋は竜山石が続く道筋となる。



【今市の町並み】



【曽根の町並み】

【みなとのまち】



（2）4つのテーマからみた高砂市の歴史文化のストーリー

高砂市の中央部には、山肌が削られてそびえ、独特の景観に目を惹く山がある。これが、古墳時代から現在にいたるまで、1,700 年以上も採石され続け、地域の地場産業を育んだ竜山石切場である。

竜山石は高砂市でしか採石されない貴重な石である。凝灰岩としては加工しやすく、赤、青、黄の美しい色合い、風合いを持つ。その石材は、日常生活に不可欠な資源として供給され、古代は石棺、中世は石造品、近世以降は建築・土木資材として、時代を超えて、各時代の需要に応じて使用され続けた。独特の風合いを持つ竜山石は、高砂市の市域を超えて愛され活用され、古代から近代に至るまで、水運を用いて西日本各地に幅広く流通した。

とくに古代は珍重され、例えば飛鳥寺や平城宮にも竜山石が使用されている。

石の宝殿は竜山石を利用した古代の遺跡であり、その形態や制作方法の不可思議さ、形状規模のユニークさから、石の文化の象徴として信仰の対象となり、今日まで保存されてきた。

竜山石製品は高砂市内のいたるところに見られ、例えば道標や墓石、建物の土台石や塀、道路の敷石や側溝など、ごく身近に美しい竜山石の遺構を発見することができる。竜山石は高砂市の風景を密かに特徴づけている。また、竜山石の文化は、その製品のみならず、長い歴史の中で文化として息づき、市域全域に及んでいる。



【竜山石切場】



【高砂の稲荷橋：竜山石が使われている】

高砂市は瀬戸内海の播磨灘に面している。縄文海進後の海岸線の南下と、河川がもたらした堆積土などにより、市域の南部に「白砂青松」と呼ばれる、広がる平野部と松林からなる美しい地形をつくりあげた。この風景を人々は楽しみ慈しんできた。また播磨灘は水運を育んだ海であり、古代から高砂市の海岸を舟が行き交った。多くの旅人が海から「白砂青松」の風景を見て感銘を受けた。神社に残る霊松や砂浜に自生する松は、風光明媚な風景として古来より歌に詠まれた。

海岸部に広がる砂浜、温暖少雨の気候、海の干満は、この地に「塩づくり」の生業をもたらした。つくられた塩は船で各地に運ばれ、人々の食生活に欠かせないものとして重宝された。海岸部に塩田が営まれ、地域の基盤産業となり、製塩労働に従事する集落が形成され、生活が営まれた。美しい海岸部は、美しい風景だけではなく、高砂市の繁栄を支える大きな基盤となった。

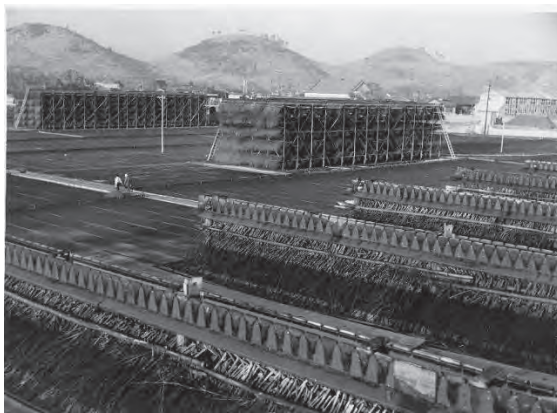
こうした豊かな自然や生業は現在失われたように見える。海岸部は工業地帯となり、人々から渚

は遠くなってしまった。しかし、霊松は何代にもわたり受け継がれ、製塩も語り継がれてきた。このように、「白砂青松」や「塩づくり」は受け継がれており、その手掛かりとなる記録や痕跡も多数残されている。

高砂市には、南北に加古川などの河川が流れている。播磨灘の舟運や高砂を東西に横切る陸路を河川がつなぎ、交易が生まれた。これらの交易のなかでモノや人が行き交い、高砂市を象徴する物資、文化が育まれた。こうした流通や文化交流の拠点となる「みなとのまち」が沿岸部にひらかれた。古代から竜山石が幅広く流通したことも、川を活用した輸送と積み出しといった河川と港を活用した舟運に恵まれたからである。高砂市の「みなとのまち」は、交易拠点であった伊保・今市、製塩で栄えた曾根、近世に築港され発展した高砂など、それぞれ異なる成立発展の歴史を持っている。それを反映して、それぞれの「みなとのまち」は文化交流拠点として、生活の営み、伝統文化や祭り、歴史的建造物、歴史的まちなみなど、それぞれ個性を持ち、魅力的な姿を受け継ぎ育みながら今日に至っている。

これらの高砂市固有の自然地形や歴史文化に基づいた文化財群は、旧集落単位に集積し、道や川で結ばれ、それぞれが関連しながら、地域や人々の身近に存在し生活の中に溶け込み、現在まで受け継がれてきた。

まちや暮らしの中に息づき、存在し続ける歴史文化遺産は、高砂らしさを再確認し、将来的に継承・創出するうえで欠かせない豊かな資源であり、将来に向けたまちづくりに活用するべきものである。



【曾根流下式塩田（昭和 30～40 年代）】



【曾根に自生する松林】



【高砂神社船渡御神事】



【西国街道沿いの茅葺民家】

【高砂市の歴史文化資源】

